## さ　三年で成果を出す

まちづくりにはとにかく時間がかかる。時間がかかるどころではなくまちづくりに終わりはないとも言われたりする。だからといって私たちが現場に関わることのできる時間は無限にあるわけではない。そのまちの住民なら、そこにいる限りまちづくりとの関わりは続くのだが、私たちまちづくりプランナーは風の人だ。ちょっと古い例えで申し訳ないが、任侠映画の高倉健のようなものだ。七人の侍ともいえる。これも古いし、死んではもともこもない。話が横道に入りそうだが、要は、課題が片付けばその土地を静かに立ち去るというのが常なのだ。

そうなると、まちづくりに終わりはないとも言ってられない。まちづくりプランナーが関わったことで地域に今までとは違う動きが生まれたという目に見える成果をあげる必要がある。それはまちづくりのゴールではなく、課題に向けた成果のベクトルをつくるということだ。小さな成果であってもベクトルがはっきりしていると、そのベクトルに引きつけられるようにいろいろな力が集まって太くはっきりとしたベクトルになってくる。

目に見える成果をあげるのに時間がかかりすぎると、せっかく地域での話し合いがうまくいっていても、地域の熱量が下がってしまう。それに一番困るのがクライアントが焦り始めることだ。そうなるとこちらも何か成果を出さなければと無理にことを進めてせっかくできつつあった地域との信頼関係を壊しかねない。

そうならないためにも、地域の実情にあった小さなベクトルを早めにつくる必要がある。おそらく最長でも三年か。地域との関係づくり、課題とその課題にどのように取り組むかといった方向性の共有、取組の主体の形成、具体の取組の実施と振り返り。早い場合だとそれらを一年でやれることもあるが、実行予算などとの関係もあるので二年から三年かかると考えた方が良い。長いようでいて時間はすぐ過ぎる。行き当たりばったりでなんとかなるものでもない。一年目の早い段階で仮説で良いので、小さなベクトルとして何が効果的で現実的かをイメージしておく必要がある。そして、小さなベクトルをどのように積み重ねて最終的な成果に辿りつくのか。その仮説をクライアントと共有しておくことが重要だ。